



気仙沼・大島の津波

ぶつかる激流。「四方を囲まれ、地獄のようだった」

伝説の「島三分断」寸前

5/28

「大津波が来たら、島は三分に分断される」。

気仙沼市の大島に残る伝説を、多くの島民は半信半疑で受け止めていた。東日本大震災で大島を襲った津波は、20m近い高さとなって中央部で合流して島を分断、さらに南部でも合流寸前まで迫った。伝説は命を守るために語り継いできた教えだった。島のシンボルであり、多くの住民が避難した亀山は火災に見舞われた。「島が焼き尽くされる」。島民は覚悟した。

(田柳暁)

孤島

3月11日の本震後、浦の浜港を見続けた。海面が大きく盛り上がり、港に停泊した100m近いカーフェリーが持ち上がった。4月5日、気仙沼市の

の浜港近くの高台に住む主婦菊田栄子さん(75)は「真つ黒な」と振り返る。の内陸部に突き進んだ

証言

3.11大震災

「真つ黒で渦を巻く激流に四方を囲まれ、逃げ場がなくなった。まるで地獄にいるようだった」

再び

「明治三陸大津波を上回る伝説の大津波が本当に来たかと思ひ、恐ろしくなった。信じられない現実が目の前にあり、立ち尽くすだけだった」



西を見ると浦の浜港側から津波が迫っていた。自宅前の県道付近でぶつかり合った。こう音とともにも大きな波しぶきが上がった。

記憶

元教諭の菊田武範さん(73)は浦の浜港近くの自宅から避難する途中、明治三陸大津波でも被害がなかった場所の家屋が、濁流にのみ込まれる光景を見た。何とか逃げ着いた高台で、以前に聞いた大津波の伝説がよみがえった。

降った人がいた。再び到来した津波に流された島民もいた」と話す。大島を三分に分断した大津波の伝説でも、現在の浦の浜港と田中浜の間で津波が合流したとされる。伝説は室町時代の津波を基にしているともいわれるが、歴史資料に記録はない。史上最悪の津波災害とされる明治三陸大津波でも、島は三分に分断されなかったことが確認されている。

「明治三陸大津波を上回る伝説の大津波が本当に来たかと思ひ、恐ろしくなった。信じられない現実が目の前にあり、立ち尽くすだけだった」

猛火 住民一丸立ち向かう

1面に関連記事

島を三つに分断するという大津波の伝説が、今によみがえったかに見える気仙沼市の大島。起伏に富む地形が幸いし、島民はすぐ近くにある山に避難した。島民約3200人のうち死者は23人、行方不明者は8人。津波の規模の割には助かった住民が多かった。だが翌3月12日、津波から島民の命を守った山から、今度は火の手が迫った。

「島北部の山が燃えている」
3月12日午後11時すぎ、気仙沼消防署大島出張所に第一報が入った。気仙沼との航路は寸断され、応援隊は入れない。島の隊員は7人。消防士長の村上喜久男さん(29)らが現場に向かった。
村上さんは「5分先も見えないほど煙に包まれた山中を進み、ようやく出火現場付近に着いた。下草や樹木の幹が燃えていた。あまりに範囲が広すぎて手が付けられなかった」と振り返る。

命守った山 翌日炎上

5/28

気仙沼消防署によると、気仙沼市朝日町の重油タンクが津波で流され、漏れた油からがれきに引火。気仙沼湾との境にある大島瀬戸にがれきが流れ着き、岸辺の木々に燃え移ったという。
火は島北部の約1200mを焼いた後、亀山(235m)の北麓を駆け上がり、山頂に達した。亀山の南麓には島唯一の小中学校などが集まる中心集落がある。火はそのすぐ近くまで迫ったが、激しい煙でヘリコプターも近づけなかった。
津波の被害を免れた四つの貯水槽の水はすぐに底を突い

「島の歴史終わる」覚悟

た。水道は断水。コンクリートミキサー車2台で何度も海水を貯水槽に運び、放水しても、広がる火の手に追いつかなかった。
「全てが火に覆われて焼き尽くされ、島の歴史が終わると覚悟した」。中心集落の漁業男性(60)は当時の心境を語る。
島民は14日、亀山と中心集落の間を通る幹線道路で、延焼を防ぐための防火帯づくりに取り掛かった。燃えやすいがれきを一扫し、火の手を食い止めようとした。
500人が幹線道路に集まった。着の身着のまま逃げた人も多く、素手で危険ながれきを片付けたり、数少ない重機を使って車を道路脇に寄せたりした。
旅館経営の小松正三郎さん(61)は「島民がこなくなった」

家が流されたり、つらいことばかりだったが、島民がこ

なに団結したことはなかった」と話す。
幸いにも、火は防火帯まで達することなく、3月17日午前11時3分に鎮火。火災による家屋の焼損、人的被害はなかった。
(狭間優作)

焼け焦げた亀山リフト。火の手は亀山の山頂まで達した

20日、気仙沼市の大島



気仙沼・大島の津波

証言

3・11大震災